

一般論として本末はとくに顛倒し勝ちのものである。

終戦直後、陸軍の技術参謀だった友人某君に、一體今度の戦争は、兵器の質からいつても量からいつてもアメリカに對して到底勝目のないことが、はじめから判つていたのじやないかと聞いてみたことがある。

その時の某君の答が、兵器についてはその通りだが、大和魂を勘定に入れるとバランスがとれる見込だったというのであつた。

そういわれてみると、當時、海軍でも訓練を特にやかましくいつて、月月火水木金金などという歌を小供にさえしきりに歌わせたものだ。その海軍が敵に優秀な電波標定機のあることを甘く見ていたらしく、こちらの得意とした夜戦において、姿も見えない敵の砲弾のため、軍艦が次から次と撃沈されてはじめて目が醒めたというような話を、後で聞いたこともある。

そして、擧句の果には特攻隊なんぞをつくり上げて、向の鐵鋼とこちらの大事な肉體とを直接にぶつからせるようなはめにさえなつた。

戰國時代、武田の騎馬隊は、その勇名が天下に轟いていた。しかし長篠合戦では、鐵砲を逸早く整備した織田方のために、山縣昌景、馬場信春、真田信綱などという一騎當千の豪傑連が、たちまち鐵砲玉的となつて武田方の大敗に終つたことは、三尺の童子でさえ知っている有名な話ではないか。

桶公の昔から飛道具に面と向わせるのは薬人形と決つてゐるのを忘れてしまつた譯である。

これなんぞは、本末顛倒の最たるものであろう。

それと同時に、こうしたことを俾そうにいえるのは、事がすんだ後だからである。

弘法筆を選ばずという諺もあるし、荒木又右衛門は奉書を丸めて柳生但馬守の眞劍と對等に立合つたという



隨筆

本末顛倒の説

星 正 治

話もあるが、一方には、名人松花堂は筆先の感觸で關東の水と京の柳の水との區別ができたという逸話も傳わつてゐる。

弘法に良質の筆を持たせてこそ、その眞價がもつとも發揮される所以だし、又右衛門が正宗の名刀を振えばさらに素晴らしい手練が見せられた筈だ。自ら筆は二の次ぎでよい、刀はなまぐら結構ということにはならない。

われわれがラジオを一台購入しようと思ひつた場合に、まずどうするか。

大體の値段を想定して、懐具合を一應胸算用した上で町に出かける。ずらりとならんだいろいろのラジオを右から左へと一覽に及んで、第一に感じの良さそうなものに目をつける。次には正札と懐とのバランスをひそかに勘定して、手頃なものを候補にする。それから、製造者のマーク位を調べてみて、頭の中に思ひだす有名會社の製品なら、それで第一の關門は通過。

そこで、おもむろに店員を呼んでその旨をつげて、かけて見てもらう。音はまずよしと聞いてから安心してツマミをひねつて同調具合を試したり、スイッチにガタが有るか無いか等を仔細らしく當つてみるくらいが關の山で、その後の取引きは至極簡單順調にいく。

この賣買手順をみると、まず目につくのは、外觀の感じである。見た目がスマートでないと、最初から問題にならない。内部に使つてあるチョーク、抵抗、コンデンサーの類の良し悪しなんぞは、家に持つて歸つてしばらく使つてみて、故障が起つてからはじめて氣のつくのが普通である。あるいは逆に内容に非常な苦心が拂われていて、丈夫でこわれないようにと注意して作られたものでも、その本當の値打が本當に判るのは、恐らく5年後、乃至は10年たった後であらう。

われわれは、物を作るのに、相手の觸手がまずどこにとどこかを考えることが必要だ。見た目がきれいでスマートであることは、なにより最初の購入意欲を發揮させる所以であることを忘れてはいけない。見掛が美しければ、後で使う場合にも、氣持よく、大事に、可愛がつてもらえる筈である。それが人情である。

せつかく骨をおつて、内容のしつかりしたものを作り上げても、外見が悪くて振り向いても見られないようなのは、弘法に禿び筆、又右衛門に竹光とまでさえいかぬのが一般である。

せつかく内容が良いのに見場が悪くて賣れないのは本末顛倒であり、外觀ばかり奇麗で内容が抜けているのももちろん本末顛倒である。

衣食足つてから後でおもむろに禮節を考えようというような心構ではない。といつて、衣食足らずして禮節だけを誇示しようとするのは尙いけな。衣食が足つても足らなくても、分相當の禮節を常に忘れてはいけないということである。

とかく、本末は顛倒しやすい。と同時に、凡人の知慧は後から出るものとも、昔からきまつる。

(1950・8・7 記)

★ ★ ★